

# ポストモダンな 学びのスケッチ (5)

## 繋がりの中で見えてくるもの

北村真也+中村正

これは筆者である北村が、かつて大学院に学び、そこでたまたま指導教員であった中村先生に出会ってしまったことで描き始められた学びのスケッチである。論文課題を抱えていた筆者は、毎週のように中村先生と2時間の対話の時間を重ねていた。それはいつの時もほぼ正確なリズムをそれぞれの生活世界の中に刻むかたちで行われた。金曜日の夜、場所は衣笠キャンパスの研究室、もしくは朱雀キャンパスのカフェ。そしてこの対話の時間は、いつしかそれぞれの生活世界全体にある特有の意味を構成することになっていった…。

と、本来ならこの「まえがき」が続くはずなのですが、今回は少し趣が違います。実は筆者は今年3月に無事学位論文『ポストモダンな学びの構築－私塾におけるその理論と実践－』を書き上げ、どうにか修士課程を終えることになったのです。そしてそれにともなって筆者と中村先生とのこの対話の時間も一旦終了することとなったわけです。

この間に書いてきた修士論文に向かうための対話の記録は、全部で27編。そのうちみなさんに御紹介できたのは5編のみですが、筆者と中村先生とのライブな学び、この場のこの瞬間にしか生まれ得ない気づき、変容の様子を垣間見ていただけたのではないかと考えております。

では、今後の連載の内容はどうなっていくのか？って…。それは、次回からのお楽しみ。今の私にもまだわかりません。ただ一つ言えることは、修士課程が終わっても、私自身の学びのスケッチは、今、この瞬間も終わることがなく継続されているということです。それは決して、同じことの繰り返しではない新しい地平を私に見せてくれているのです。

それでは、今回が一応の最終回となりました「北村真也+中村正」のライブ感あふれる世界を最後までお楽しみください。

## エピソード〈他者性〉の本質に迫る

今回の先生との対話は、先生の専門領域である社会病理学の話から始まりました。どうも先生は、私が先生の研究活動に今まで興味を示さなかったことに不満があるらしく、前回、10冊程度の先生の著作を渡されました。私が先生の研究に触手を伸ばさなかったことにはとりわけ理由があったわけではなく、たまたまそうだけなのですが、今回先生の研究の軌跡をその著作を通して知ることによって、より中村先生を知ることができたように思いました。

私にとって興味があったのは、社会病理学というものを私の指導教授である中村先生がどのように編集し、またそれが長年の研究活動の過程の中でどのように変容してきたかということであり、それが今私の目の前にいる中村先生とどうつながり、そして私自身とどうかかわっているのかというその文脈を知りたいということでした。

以前も述べましたが、私の学習者としてのスタンスは、常に先生のギリギリのところに出会いたいのです。そのためには、学習者である私自身に問題提起が必要なのです。今回私は、先生の研究活動の文脈を私なりに捉えたいと、私なりの問題提起を先生にぶつけ、そこから生まれる新たな思考を互いに共有していったのです。

「ベトナムに先生からいただいた先生の本、全部持って行って飛行機の中で読みましたよ」

「で、何で今まで関心を持ってくれなかったの？」

「社会病理学ですか、きっと私のフレームの外にあったんだと思います」

「でも、一応指導教員ですよ、それは…、それは…」

「そうそう、先生と最初あった時、立命館のパンフレットとかを渡されて、何か大学改革の話をしたじゃないですか、社会病理学ではなくて…。きっとそれが入り口だったからですよ」

「それは、一応職責上のことですから…。私の中では切り離されているわけではないんですがね…。ただ私は教育学が専門じゃないし、専門知識を元にやっているわけではないしね。直観的といえば直観的だし…。大学経営なんて定型的なモデルがあるわけではないしね。ただ指針は要りますよね。でも自分勝手にやってるんじゃないかと、

不安にはなりますよね。だから、大学経営、教学経営をやっている人たちと学習会をやったりするんですが、でもどれもピンとこないんですよ。それに青年期だって揺れているわけですからね…。私は教育の対象化というよりも、学生が学習主体としてどう変化していくかということに関心があるわけですよ。だから、ベイトソンの学習理論、コミュニケーション理論に関心があって、その話を最初からしてるわけですから…」

「そうそう、だから私はそんな人やと、思ってるわけですよ」

「それはそれであるんですが、特に研究論文を書いているわけではないし、ひたすら直観的に、でも結構楽しんでるところもあるんだけど…」

「でも、先生が書いた〈臨床社会学構想〉、これって従来の〈社会病理学〉の定型的な捉え方を超えたいという文脈で書いたでしょ？」

「そうそう。〈社会病理学〉って解釈なんですよ

ね。だからどうしても問題解決するためのあれじゃないんでね。かといって〈臨床心理〉みたいに狭くとらえたくない。あるいは、〈社会福祉〉や〈社会政策〉や〈社会改良〉というコトバだけでも陳腐なものだから…、もう少し個と全体がせめぎ合う場で、もう少し臨床性もあって共に変容していくのがいいかなあと、たまたまそういう言い方をしている」

「まあ、そこらへんは、教育的だと言えますよね…」

「『京都発NPO最前線』という本があったでしょ。あれは近いかな。あの本を書いた時は、ちょうど阪神淡路大震災があったんですよ。“災害ユートピア”というコトバがあって、何か大きな災害があると、社会の共同性が非常に高まるんですよ。社会全体が“感電した状態”になるんですよ。特に青年期の若者は、その揺れが大きい。そのことがあって、その後NPOやNGOの活動が社会に浸透し、定着していくことになったんですよ。あの震災が起こった時に、ちょうど大学の試験中だったんですよ。当時の学生たちは、“こんな時に試験をしている場合じゃないからレポートに変えてくれ”って言って、ボランティアに大勢出かけていくわけですよ。そこで感動を覚えて、そのごこうしたNPO活動で飯を食いたって言いだして、それで京都NPOセンターを立ち上げたんですよ。彼らは、今30代になってるんですが、まさに震災世代ですよ。感電したんですよ。彼らは連帯が強い」

「そうですか」

「それで、当時これらの非営利団体を第3セクターと呼んだんですよ。第1セクターが国家、第2セクターが企業、そして第3セクターが非営利。でも私はこの言い方が大嫌いなんです」

「何でなんですか？」

「何で3番目なんですか。非営利なんていうの

は、0セクターなんですよ。どこでもあるもとなんですよ。人間の歴史以降、あるいは動物もそうなんですが、何とか生きようとして共同性を高めてきたわけですから、生き延びるための手段が社会ですからね。それが残念ながら、喧嘩したり戦争したりしてるわけですがね。だから、0セクターなんですよ。ね。“Commons”なんですよ。だから国境も超えてしまう。No boarderなんですよ。そういう共同の形がずれたり、ねじれたりすると、個人が生きにくくなって、ある逸脱性を持つてくる。それを一応社会病理とするんだけど、解釈の問題とするわけです。逸脱性というのは、ある種の先端なんです。〈カナリヤ理論〉というのがあるわけですよ。生きづらさを持っている人たちは、まさにカナリヤなんですよ。先端に生きる人たちかもしれない…」

「先生にいただいた10冊の本、それのは大きく1990年代のDVもしくは、男性性の研究と2000年代の臨床社会学へと導かれていく研究の大きな2つの流れがあったでしょ」

「そうですね」

「そこでの私の論点は、自分を他者と切り離してみない視野というか、例えば妻に暴力をふるうバタラーの研究、その暴力性を先生は自分自身の暴力性とのつながりの中で捉えようとしている」

「エピソードに書いてましたね。そこなんですよ」

「その視野があったから、先生の2つの研究はつながっている。つまり、DVの研究からNPOの活動へとつながって言ったんじゃないかと思うんですよ」

「まあ、最も関係性が作りやすいのは、加害者なんですよ。被害者は比較的關係性を作りやすいんですよ。加害者は、ラベルを張ってしまいますからね。ラベルを張ってしまうと捉えやすくなる側面と関係が切れてしまう側面がある。これは佐々

木さんのラベリング理論もそうだけど、ラベルを張った段階で関係が切れてしまうんです」

「自分から関係を切ってしまう」

「そうそう、関係が切れてしまうんです。発達障害もそうだけど…、加害者をもっともその傾向が強いんですよ。“善人なをもて往生をとぐ、いはんや悪人をや”という親鸞のコトバがあるように、悪とされている人たちとの関係を切ってしまうてはいけないと思うんです。それは私自身に悪があるからなんですけどね。たまたま今は、何かの条件で悪が大きくなならないようになっていますけど…。天使だけで生きているというのも偽善だしね。自分の中にも悪魔性があるしね。でも悪魔性が見えている人たちっておもしろいんですよ。まあそれをわかりやすく表現したのは芸術ですからね。芸術は悪魔性をうまく昇華させるしくみを持っている。フレームがあるから…。スポーツもそうかもしれないですね。お祭りもあるいはセックスもそうかもしれない…。だから、そういう世界に私も

生きているわけだし…。男性性も持っているし、女性性だって悪魔性をもっている。だから私が加害者に注目するというのそういう意味があるんですよ。」

「よくわかる」

「犯罪は、〈反社会性〉の典型なんですよ。ところが、逸脱性とか病理性とかをおくと必ずしも〈反社会性〉だけじゃなくて〈非社会性〉とか〈脱社会性〉とかコトバが出てくるんですよ。〈非社会性〉の典型はひきもこり、〈脱社会性〉の典型はカルトですよ。〈反社会性〉〈非社会性〉〈脱社会性〉これらのコトバをマトリックスにおくと、いかに自分は社会に適応して生きているかが見えてくると同時に、いかに陳腐な人間であるかが見えてくるんですよ」

中村先生に社会病理学を語らせることができ、私は大変満足していました。先生が社会病理学そのものをどのように切り取って見ているのか、その輪郭が私にも共有できたように思います。話は、ここから他者性のことへと進展していきます。加害者を理解しようとする中村先生の姿勢と生徒を理解しようとする私の姿勢が、ここでつながっていくのです。

「私が生徒、だけではなくて、いろんな人と関係を作っていく、あるいは相手を理解しようとするためには、何かを共有しないと理解できないと思うわけです。そして共有される部分が見つければ、例えば私と中村先生のことに関しても、一旦共有できれば、それは中村先生のものであると同時に私のものでもあるわけです。そしたら、その共有されたものを支えている思考や感情を今度は自分の中で探ることができるじゃないですか。そうすると今度は、こうかもしれないという見当がたつ。私の問いはたいいていこうして返しているこ

とがおおいじゃないですか…」

「そりゃ、これだけオフィスアワーを入れるくらいですからね。当然そうなるわね」

「大事なことは、“中村先生の中にあるものが、私の中にもある”これが前提なんですよ」

「それはそうですね」

「だから、多少私の書いたものを読まなくても、後追いでいいのかなって思うんですが…」

「だから、あらためて先生の本を読んで、先生の捉え方を確認できたわけですよ」

「でもなかなか、こんな加害者研究なんかは理

解されないんですよ。世の中は厳罰主義に走っていますから…。なかなか一筋縄ではいかないんですよ…」

「でもそんなふうに切ったりラベルを張ったりする社会のあり方から、“Commons”は決して生まれてこない…」

「そうなんです。 “村八分”は、“村十分”ではないんですよ。二分の関係を残しているんです」

「そうやね」

「だから、どこかで私とつながっているんですよ」

「そうですね。でもよかったですよ。この機会

に先生の本が読めて…。一気に読みましたよ。飛行機の中で…」

「ありがとうございます。あの時、目についたものしかあげられてないですから、もっとあげますよ。でもよく読んでくれていますよ。大したものですよ、この読書量。ベイトソン読んだ時もそう思ったけど、すごい読む力ですね」

「それは、中村先生だって、ベイトソンだって、つながりたいと思うからですよ。それだけです。その動機が、自然と深い世界に導いていくだけのことです」

私は、ここで他者とのつながりを議論するにおいて、今この瞬間に展開されている私と中村先生との関係とその題材として取り上げます。ベイトソンに言わせれば、これはメタログということになるのですが、議論の内容が同時に今この瞬間に展開している議論と交差するのです。つまり、議論の内容が今とつながっているため、より深い理解をこの瞬間に双方にもたらししていくのです。この手法は、私は生徒との関係においてもよく使います。

「あと“Global Citizenship”のことだけど、私にとっては“他者とともにある感性”っていうのがとても大事なんです。ということは、自分の中の“他者性”に気がつかないといけない。悪魔性ですよ。自分の中の差別性とか…」

「自分の陰の部分ですよ。陽のあたっている部分は、知っているからね。知らない部分…」

「そうですね」

「“他者性”ね…。実は私は、94年にバンクーバーに少し住んだことがあるんですよ。その時、カナダ人は私にとって宇宙人だったんですよ。私と違った世界に生きる人たち。でもホストマザーが、なぜかわからないけど、私に小児糖尿病で苦しんできた娘さんの話を涙ながらに語ってくれたんですよ。その時初めて、私はカナダ人を同じ人間として認識するんです。“この人たちも私と同じ感情を持っているんだ”と…。もちろん頭では理解で

きているわけですが、どこか受け入れていない。でもある瞬間から、“私と一緒になんや”という感覚が持てるようになって、そこから新しい関係が始まる。これって“他者性”っていうのかなあ…。“一緒になんや”という感覚が大切なんです。“一緒になんや”という感覚が見いだせるまで、自分の意識を探っていく…」

「まあそういう“うごめき”をさせてくれるんですよ。他者性の強い人は…」

「“探らないかなあ”って、探りたくなるんですよ。たぐりよせたり、理解したり、“何か一緒になんや”って思わせてくれたり、ざわめかせる人たちなんで、私にとって他者性の強い人たちは…。ものすごく大事なんですよ…」

「“他者性”の強い人たちって、どういう人なんですか？」

「私にとっては、子どもなんかもそうですし、

女性なんかもそうなんです」

「簡単にわからない人？」

「そうです。縁に行かないとわからない」

「なるほど、そこもうばっちり私と一緒にじゃないですか？」

「縁に行かないと…」

「でも私の表現でいくと、縁ではなくて、意識を深く探るってことになるんですが…」

「それは両方ある、広く深く探るんです」

私と中村先生は、ほとんど同じ意識の使い方をしているのだろうか。もちろん違いがあるとは思っただけけれど、こんな風に議論を続けていくと、ますます似てくるかもしれない。これがまた面白い。

「さっき話に出た“Global Citizenship”についてですが、私の連れ合いが中村さんに聞いてきてほしいというわけですよ。というのは、立命館学園は小学校から大学院まで経営してるでしょ。だから当然この“Global Citizenship”について何らかの見識を持っているはずだというんです。だから教学責任者である中村さんに聞いてきてくれって」

「そうですか…」

「この“Global Citizenship”というトピックは、たまたま私と連れ合いがベトナムの学校を訪問した時、私がアイデンティティーの問題を質問したんですよ。ベトナムのエリートたちは、小さい頃からアメリカの教科書で学び、英語を習得し、アメリカの大学へ進学しベトナムへは戻ってこないんです。前に私が訪れた台湾も同じでした。アメリカの社会はよくてドメスティックはよくないんです。彼らにとっては…」

「そうですね」

「優秀な人がみんな流出していくんですよ。こういう状況では、文化なんてあつという間に喪失してしまう。何千年もかけて構築された文化が、ほんの数十年の間に消え去ってしまうことが私には忍びないんですよ」

「つらいよね」

「つらいです。だからこの“Global

Citizenship”は、ドメスティックを否定して他者化していくのではなく、ドメスティックにありながら、他者を受け入れる形にならないといけない。そしてこの問題を先の“他者性”の問題と重ね合わせてみると、他者を理解し他者とつながっていくためには、自分の意識を探りながら共有領域を見出さないといけないという論点にぶつかるわけです。これまさに教育の問題。そういう人間をどう育てるかという問題につながっていくんです。だからこれを、立命館ではどう考えているのかということなんです。この間、大学のエクステンションの話をしたじゃないですか。大学も安直な方向に走ろうとしてる話。アウラに立命館小学校の生徒がいるんです。立命館小学校では、5年生が全員英検3級をめざすんですって、これって今話してる論点と全然違うじゃないですか…」

「違いますね。だから、そこが制度上の矛盾なんですよ。これだけ大きな制度ですから…。確かに北村さんの言う通りなんです。でも、まあ同化と異化という側面があるので、我々は革命の戦士を育てているのではありませんから…。社会に同化しながらも異を唱えられる人が必要なんです。異化する理念ばかり出しても支持されないと思うから…。ただ今は、社会化が少し表に出過ぎているのかもしれない…」

「中村先生が、例えばバタラーの研究で自分の

暴力性を持ちだしてきて、それを彼らとつなげようとしているわけですよ。それを読んで、私はすごいなあと思うわけですよ。でも考えてみれば、私がすごいなあと思うのには、世の多くの研究者が自分のことと切り離して研究活動をおこなっているという前提があるからです。中村先生は、そういう意味ではマイノリティーの研究者として私の中で認識されたわけです」

「そうかもしれません」

「私もマイノリティーの教育者です。なかなか学校の先生とは論点が合わないですから…。で、私の質問は、どうしたら先生のような他者性を共有できる人が育つかです。もともと先生はそういう人間であったのか、つまり他者性が個人の資質に還元される問題なのか、あるいは教育の課題として捉えることのできる問題なのかということなんです」

「……」

「私の言っている意味がわかりますか？これ、とても大切なことなんです。そういう子どもたちで育てたいじゃないですか？」

「私をこんな風に育ててくれたのは佐々木さんだからね。でもどうしたらそうなるのか、わかんないですよ…。でも育てなくちゃ、いかんでしょうね。育つものなのか、花開くものなのか…。まあ土とか肥しとかはあるんでしょうがね…」

「まあ、私にとっては、アウラがその土壌のよなものなんです」

「そうやね」

「アウラの土壌に、私が私自身をしみこませて

いく。アフォーダンスですね。それで私は個々の生徒に関わりながら、彼らの見えない世界とつながっていく。そしてそこに揺さぶりをかけていき、彼らはやがてそれに気が付いていく。アウラは、そんな仕掛けなんです。見えないものを扱おうと思うと、必ずそこには何かの媒体がある。見えないものだけを扱おうとすると抽象性が高すぎて自分と切り離されてしまう。だから具体的に共有される経験とか作業とかがそこにいる」

「そやね…。まあ大学では、ゼミナールとか…。佐々木さんのゼミでは長時間やりましたよ。とにかく何らかの場がいますよね。場が、その年齢にふさわしい…」

「そうそうそう、場があるんです。場が…」

「まあ、我々の若い頃には、そういう場が京都の中にもいっぱいあったからね」

「出町のジャルダンとか…」

「そうそうそう、ジャルダンね。まあ、あふれかえってましたよね。今はそういう場がないからね。お仕着せの教育になってしまったり、至れり尽くせりの教育だったり、何か履き違えてますよね」

「モノも情報もね。でもやっぱり多くの情報をみんなが持ってしまったことは、いい意味でも悪い意味でも大きなことですよ。簡単にわかった気になってしまう。上滑ってしまう。情報と自分が切り離されてしまう」

〈他者性〉を備えた学習者をどう育てるか。そのためには、以前に取り上げた省察的思考、あるいはメタな思考が必要となってきます。そのような思考を自由に使いながら自分の意識を多面的に観察し、他者と共有できる領域を探る必要があるようです。そして他者の存在を自分の内面に見出すことで、Global な意識を獲得することができるのです。このことは〈共同性〉ということを考える上にも、大変重要なことかもしれません。

「エピソードの中に最初のクラスターの時の話があったでしょ。あれずっと引っかかってたんですよ。“何かやったから子どもが変わるってことではない”っていうこと。でもあの場では、“いやそんなことはない。北村さんはなにかやっているはずや。だからビデオでも撮ってみたら…”なんてこと言われたでしょ。あの時、“そうかなあ”って、何も言えなかったんですよ」

「それ村本さんだ」

「そう、村本さんもやし、尾上さんも…」

「いや、それは、アウラを知らないからですよ。場というものがある。場作りっていうこと…。一度見せた方がいいですよ。それはアフォーダンスといえば、アフォーダンスなんだけど、まったく北村さんが、何もやってないということではないと思うんですが…」

「いや、だからあのエピソードは、前に十分に言えなかったことを、書いてみたかったんですよ。私なりに言語化できて嬉しかったんです。ただ、村本さんや尾上さんの思考には、人は自分が何かやらないと変わらないという考え方があるように思ったんです。(操作する意図)そこが少し引っかかるんですよ」

「あるかも知れんね。ただ、北村さんは、何もやってないわけではないんですよ。アフォーダンスを形成すると同時に、何かやってる可能性がある。通例の教育的営みのようなものではなく、伝統的で力学的なものでもないんだけど…。もうちょっと作用としてあるのは…、脱学習ということ。(Unlearn) をやっているんだと思う。

(Unlearn) を仕掛けているんですよ」

「(Unlearn) ?」

「(Unlearn) は、鶴見俊輔がかなり言ってるんですが、鶴見俊輔はヘレンケラーから聞いたと言ってるんですよ。(Unlearn) というのは、一旦編

み上がった毛糸のセーターをもう一回ほぐして別のものを自分で作り上げていく作業だと言ってるんですよ。だから鶴見俊輔は、これを“学びほぐし”と呼んでるんですよ」

「例えば私の話では、具体的にどんなエピソードが、この(Unlearn) に該当しますか？」

「数学の先生の話ね。凝り固まってるでしょ。それを北村さんが(Unlearn) させてるんですよ。それからK君の話もそう…。これもものすごく、ディープな作業だと思うんですよ。これもアフォーダンスといえばアフォーダンスなんだけど、そういうコミュニケーションをしているなと思うんですよ」

「なるほどね」

「(Unlearn) って難しいんですよ。バタラーの教育なんかもそうなんです。妻に暴力をふるわなければいいと思ってるんですが、それは表面的なことなんです。何かパワーとかあるいは自分の持っているリソースで人をコントロールしようと思った時にもうすでに暴力が始まっているんですよ。だからそれは難しいんですよ。そういう人に対して脱暴力を仕掛けられないと社会は本当に脱暴力する力を持ってないんですよ。戦争反対なんて、嘘っぽい言い方なんで、まず目の前のバタラーをどうするかという力を持たないと、なかなか平和構築なんて難しいんですよ。だから(臨床性)というのがとても大切なんです。有形力とまでいなくても、何か力を行使して相手に何かをさせるというモードって、一般的にみんな持っているんですよ。まあそれが経済的報酬に移っただけですよ、企業というのは…。しかし、我々はそういう世界を生きているわけですから(Unlearn) っていうのは、とても難しいんですよ。でも北村さんは、それをアウラの中で見事に仕掛けているんですよ。これはビデオにとっても見えてこない」

「でもそれは、私自身が常に〈Unlearn〉しながら生きていくということでしょう？」

「まあ、そうですね」

「私にとっては、ごく普通のことなんです。作り上げてはまた壊し、また作り上げる。これごく当たり前のことなんです」

「〈脱学習〉というのは、〈脱中心化〉であるといったのは、ピアジェなんですがね。そうそう、だから縁に行かなければならないんです。私、ピアジェから学んだことも多いんです」

「ジャン・ピアジェね」

「〈中心化〉というのは、アイデンティティーの求心力なんです、それに凝り固まると他者が見えなくなっていくんで、〈脱中心化〉というのが必要になってくると、彼は言っている。社会には絶えずまとまろうとする圧力があって、おまえは誰だとか、やりたいことは何だとか…」

「でもね、私も日々いろんなことやらなあかんです。先生の顔もあるし、塾長の顔もある。経営者の顔もある。それにアウラは家と一緒にいるから、生活者の顔もある。学生の顔もあるし、面談をするカウンセラーの顔もある。行政の会議でのアイデアをプロデュースする顔もある。本当に日々いろんなことをしないといけないんです。それで気を緩めると、すぐにやらないといけないことの山ができる。仕掛状態のことが山になる」

「そんなの私は、いつもですよ」

「先生はいいかもしれないけど、私はいやなんです。ひとつひとつきれいに片づけたい」

「そんなの無理ですよ」

「いや、私はそうしたいんですよ。散らかっているのが嫌いなんです。こじんまりとまとまりたいんです」

「そんなことはないでしょう。そんな風には絶対見えない」

「いや、本当はそうなんです。でもこじんまり収まるかと思えば、それはそれでまた壊したくなる」

「でも、こじんまりは違うでしょ」

「だって修士論文だって、最初はレイブの正統的周辺参加論とノールズの自律学習理論、それとメジローの変容学習理論を適当に組み合わせて書くかと思ってたんですから…。私一人だったら、適当に起承転結をつくって50枚くらいでまとめようとしてたと思うんです」

「ダメだよ、そんなの！」

「私一人ならそうなるって…」

「それは〈Unlearn〉してないですよ」

「だからこんなどこで終わるかわからんような作業は、私にとってはチャレンジングなんですよ」

「いいじゃないですか、答えてくれてるんですから…。こじんまりまとまってないんですから…」

「そういう意味では、私を〈Unlearn〉させてくれてるんですから…」

「いいじゃないですか。修論だって終わらないですよ、一つの通過点ですからね。こうやって出会ったからには、ずーっと続けてくださいね」

「どうなんのかね…」

「これだけたまれば、財産じゃないですか。ただ修論の時は編集しないとイケない。ただそれがこじんまりかどうかは、わからない。こじんまりにならなくてもいいんじゃないですか」

というあたりで、今回のオフィスアワーは終わりました。このオフィスアワーも回を重ねるごとに、その内容が濃くなってきている気がします。録音した内容を原稿に起こす量も確実に増えています。でも考えてみれば当たり前のことで、それだけ私と中村先生との共有された領域が増えてきているのですから…。それにしても、二人で時間を忘れて対話を続け、互いにインスパイヤーされながら対話を楽しんでいる中年のおっさんたち。周りから見ると結構、滑稽に映っているのかもしれない。